あしたばん

2011年
（平成23年）
12月5日
月曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第十九号

甘い香りと笑い声につつまれて

～三宅島クッキーをつくろう！～

十二月三日、三宅島大学の講座「三宅島クッキーをつくろう！」が開講された。あいにくの雨天にもかかわらず、小さな子どもから大人まで、約30名の参加者が会場のアカコッコ館に集まり、笑い声に囲まれながら終始にぎやかな講座となった。

参加者たちはまず、クッキーの生地を練るところからはじめた。うっすらと色のついた粉に少量の水を加え、透明なポリ袋の中でこねる。固まり始めるまでに少し時間がかかるため、子どもたちのテーブルからは「もっと水を入れよう！」という声も挙がっていたが、ここは我慢。最初は粉末状だったのが、こねていくうちに粘り気が出て、赤・青・黄・緑という、四色の「食べられる粘土」になっていく。参加者の中には、お互いの粘土を見せ合い、その固まり具合を自慢し合ったり、まわりより早く固めようとこね方を工夫したりする姿も見られた。

粘土ができあがると、クッキーの形づくりに移る。粘土を細かく切り分け、パーツごとに丁寧に形を整えていく人。いくつかの色の粘土を、とりあえず混ぜ合わせてみる人。キャラクターや動物をつくる人もいれば、文字を入れた看板をつくる人もいて、つくり方にも、つくるものの形にも、それぞれの個性が出ていた。

そしていよいよ、オーブントースターに入れて焼きあげる。一台しかないトースターを前に筆者があたふたしていると、その場にいた女の子・ハルナちゃん（五歳）が、自らお手伝い役を買って出てくれた。次々と焼き上がるクッキーを、まだ温かいアルミホイルにのせたまま、つくった人のところへ運んでいく。「躓いて落としてしまわないだろうか…」と父親のように心配しながら見ていたが、「できたよー」という可愛らしい声とともに届けられたクッキーは、より一層美味しく感じられたはずだ。部屋の中には甘い香りがただよい始め、あちこちで嬉しそうな声が聞こえてきた。

丹精込めてつくったクッキーを、誇らしげに見せ説明する子どもたち。子どもたち以上に真剣なまなざしで粘土をいじる大人たち。講師陣も含め、参加者同士がクッキーをつくりながら楽しそうにお喋りしていた様子が、とても印象的だった。

（水谷　晃毅）

ただいま　三宅島

今年六月に初めて来て以来、今回は半年ぶりの滞在となった。前回、島を離れる際に、港で手を振る見送りの人々がどんどん小さくなっていってもあふれ出る涙を止められなかった。長い間滞在していたわけではないが、島で過ごした時間のなかで感じたもの、得たものがあまりにも大きかった。噴火を繰り返している火山と共に生きる暮らしがあるということ、その軌跡が島のいたるところにあるということなど、ありとあらゆるものを感じ、身体のなかに取り込まれていくような感覚を覚えた。

あのとき必ずまたここに来ると心に決めた。しかしその強すぎる気持ちとは裏腹に、都合をつけられずに二度のチャンスを逃した。三宅島大学の仲間達が、島での日々を重ねていくにつれて、私は置いていかれるような気がしてならなかった。それは、島での一日の価値を自分なりに噛みしめていたからかもしれない。一日でも多く島にいて、島の空気を吸って、島のこと、島で暮らす人びとのこと、そして島と自分たちとの関わりについて考え、それを何か形にして実践していく場に携わりたい、そして何よりも島をもっと知りたいと思いばかりが増していった。

今回、私はようやくチャンスに恵まれ、半年のブランクを埋め、欲張りすぎるくらい島での時間を無駄にしたくないという思いを抱いてここへ来た。島の空気を味わえたことはもちろん、取材を通じての新たな出会いや、三宅島大学が島に浸透し始め、講座の参加者が増えてきていることなど、様々な経験と、実感を得られたことがとても嬉しかった。そして何より活動に際して、多くの皆さまにご協力頂けたことに感謝したい。

久しぶりの割には、意外と道を覚えていたこと、地理感覚がつかめてきたことに少し驚いた。仲間の中で三宅島のことならあいつに聞けって言われるくらいになれたらと思いつつ、でもまだまだこれから。

悪天候のため、やむを得ず延泊になったが、帰れないのも悪くない、むしろ嬉しいくらいだった。ここでの生活、三宅島だからあること。これを受け入れてこそ、島との結びつきがまた少し強くなれる、一歩近づける気がした。ぎりぎりまで三宅島を存分に味わって、また近いうちに来られることを楽しみに、島を後にする。

（森部　綾子）

今回の講座レポートは、
三宅島大学Webにて
近日公開予定！

▼コチラからご覧ください。
http://www.miyakejima-university.jp

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

三宅島エッセイ

島びより

『ただいま』を言う日まで。

飯田　達彦

これで、四回目の三宅島。六月に初めて来てから、まだ半年しか経っていない。ずっと地元に住み続けている自分にとって、他の土地にこんなに継続してどこかに行くという経験はない。だから、三宅島には「通う」感覚を持ってしまった。

もちろん、回数だけでそう思うようになったわけではない。島の景色を見てまわり、島の料理を味わい、島での生活を身体が覚えようとした。そし何よりも、人びとの顔がわかるようになり、言葉を交わすようになったことが、「また会いにいかなきゃ」と自分に思わせるようになった。

本当に、色んなことが思い返される。就職先の選考を受ける前、選考中、結果が出てからと三宅島に来るたびに話を聞いて心配してくれた。インタビューのためにお邪魔した民宿に忘れ物をして取りにいったら、元気づけてくれる手紙も封筒のなかに入れてくれていた。三宅島大学の講座でつくったポスターを渡しにいったら、涙ぐんで喜んでくれた。自炊をしていて島のものを食べてないと言ったら、次の日にはタッパーいっぱいに手料理をくれた。家に招待してくれて、毎日の出来事を記しているカレンダーに自分のことを書いてくれた。まだまだここには書ききれないほど、一つひとつの出来事が頭に浮かぶし、お礼は言い尽くせない。

現在、大学四年生である自分。卒業するまでに三宅島に来る機会があるのか、卒業してからも、いつ三宅島にまた来られるかもわからない。けれど、もう三宅島には「通う」感覚が身に付いている。まだ三宅島大学だって卒業していない。だから、次に来るのはいつにしようか、頭が勝手に考えてしまっている。ちょっとあいだが空いてしまうけれど、きっと船に乗れば大丈夫。竹芝から六時間半、島のことを想うには十分な時間があるから。

一足早い、クリスマス

十二月三日夜、三宅村公民館にてアカコッコ合唱団主催のクリスマスコンサートが開かれた。

私にとって、今回が初めての三宅島大学への参加である。三宅島の方々とお話する初めての機会だったので、ぜひ三宅島大学の講座やこのような時間を通してお話などできれば良いなと考えていたので、クリスマスコンサートに行くことができて本当に良かった。

わたしたちは、アカコッコ館で「キャンドルをつくろう！」の講座の片づけを終え、車に乗って公民館へ向かった。会費の五〇〇円をお支払いして会場の中へ入ると、手前の方にはたくさんのお料理が並び、舞台の方にはマイクや楽器が置いてあって、心なしかウキウキした気持ちになった。時間が経つにつれ、ぞくぞくと島の方々が入って来た。中には、先ほどアカコッコ館での講座に参加してくださった方々もたくさんいらっしゃって、改めて皆さんと違う場所でお話できたのが嬉しかった。

コンサートのプログラムは、三宅島合唱団の方々を中心に回されていた。「アメージング・グレース」のきれいな合唱から始まり、フラダンスやウクレレから、「青い山脈」などの懐かしい曲、讃美歌のソロまで、ジャンル豊かな内容であった。皆さんがそれぞれ、楽しく充実した時間を過ごされていたように思う。皆で「ふるさと」を歌い、それぞれ故郷への思いを馳せた。

わたしたちは途中でおいとますることになってしまったが、こころがほっこりする、素敵な会に参加させていただいて本当に楽しかったです。ありがとうございました！

（川村　恵理）

初 三宅島でともった灯

十二月三日の午後二時から、アカコッコ館にて、三宅島大学講座「キャンドルをつくろう！」が開講された。この講座では、たまごの殻に溶かしたロウとアロマオイルを入れて固めたキャンドルを作った。

今回、私にとっては初めての三宅島上陸であり、三宅島大学参加であった。正直な話をすると、私は右も左もわからぬまま、二日の早朝、島に上陸した。あいにくの天気のせいで島を見て回ることもできず、二日は一日中、キャンドルの試作品を作ることになった。しかし、実際に作ってみるとなかなか上手くいかず、試行錯誤を重ねているうちに、気づいたら夜になっていた。ようやく試作品が完成し、キャンドルを灯す事ができた時、なんとも言えない嬉しさがこみあげてきて、早く島の方々とこの嬉しさを共有したいと思った。

三宅島大学での講座には、親子連れの方やお一人の方、友人同士でお越しの方など、たくさんの方々が参加してくれた。キャンドルに顔を描いた方や、持参の瓶でキャンドルを作った方など、作るものも十人十色、様々ものができあがった。皆が作った形も香りも違うキャンドルを、机の上に並べ、部屋の電気を消し、一つずつ灯す。全てのキャンドルが無事に灯ると、自然と笑顔と拍手がわき起こった。皆でキャンドルの灯を見ていたあの時間の温かさと嬉しさは、きっとあの場所にいた誰もが感じていた。

いつもは違う場所で、違う時間を過ごしている私たちが、同じ場所同じ時間に、何かを共有することができた。それだけで本当に嬉しくて、「三宅島に来られてよかった」そう思ったのである。

（関取　花）

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。